

筆間余話

天涯茫茫生

「医事・文談」が、5月1日号で千回に達するということを担当の事務局職員に教えられた。毎回自分でナンバーを書いているのだから、覚えていなければならぬのに、教えられて初めて気付いたというのはいかにもボンクラである。

時々、回数を誤って記入して職員に注意されたことがあるから、回数について平素からあまり関心がなかったことになる。云われてなるほど千回になるのかと納得したところで、会長との対談を企画したから引受けてもらいたいとの申込を受けることとなった。

考えるまでもなく、耳は遠いし、総入歯はこのごろ歯肉がやせ細ってガタガタして喋りにくく、聞きぐるしいだろうから、逆も無理なことは分りきっているので、即座にお断りした。

しかし小生の固辞にもかかわらず、会として既に計画したことなどでなんとか承諾してもらいたいとの強い要望である。そこまで云われては、小生としても引受けざるを得ないので、止むを得ず情報広報部の計画に乗ることとなった。

その結果が、前号に載せられた「特別対談」

である。白寿の小生に旨い受け答えができたとは思えないが、大爆笑で終わったのだから、まずは成功ということだったのだろう。会長、藤原情報広報部長、陪席して記録を採っていたいただいた北海道医療新聞社の役職の方、事務局職員などにどうもご苦労でしたとお礼を申したい。

しかし会員からは、なぜそんな個人的な記録を載せるのかとお叱りの投書が寄せられたのではないかと心ひそかに恐れているのである。

それはそれとして、この「医事・文談」を予定の如く、うまく収束するには、どうしたらよいであろうか。いまは正岡子規周辺の人の列伝を書いているのであるが、それがかなりの人数である。なんとか完結にまで持つてゆくには、ひとりひとりの記述を極度に圧縮しなければならぬだろう。子規との生前の関係については、かなり筆を費したから、子規死後のことを主にするしかないだろう。なかには子規の年齢の二倍以上も生きた人もいる。

プロ野球の選手や相撲取りが、記録のことを聞かれると「永年やっている」とよく云うが、小生の場合は「締切りがあったから」というしかない。それにしても50年近くは、よく続いたというべきか。

それに小生は、碁・将棋・マジシャンはできず、趣味というべきものを全く持たないことにもよるかもしれない。室内の娯楽ができ

ないとしても、なにか戸外の遊技ができるかといえ、冬の間は歩くスキーをやるだけである。それでは時間のつぶし方がないのである。それではゴルフという高級らしい遊技はどうかと問われるかもしれないが、クラブに手も触れたこともない。

この頃「老いてこそ人生」だとか、老後の楽しみ、暮し方などを説く本を時々見かける。しかしそれは極く極く一部の人のことであつて、大多数の老人（今の日本では十分の一に近い人達）は、年金暮しの余裕のない生活で、どうやってそれができるだろう。それにガソリンをはじめ、生活必需品の高騰が、ひしひしと身に迫っている現状は前途は暗いといわざるを得ない。白寿の老人がそんなことを心配しても仕方がないのだが…。

さて対談でも千回以後の筆名を考えているのかと問われた。筆者が明らかにされた以上、実名を出してもいいのだが、今更少々気恥ずかしい。いろいろ考えたが、日頃何もせず茫然としているので、茫茫生、それも生涯にわたつてのことだから「天涯茫茫生」はどうだろう。それで今しばらくお附合を願うことにしたい。それもそう長い間ではないことは受合である。小生がこの世をおさらばするか、或はボケてこれ以上の執筆に堪えなくなるまでのことである。それでは大台の回数に向って氣力を振りしぼって立ちむかうこととする。よろしくお願ひしたい。